

【系統主義 vs. 生活教育か?】

〈問題解決学習（探究）〉を唱える生活教育に対して、「はいまわる経験主義」というレッテルをはり、「科学や学問を軽視している」「系統がない」「学力がつかない」との理不尽な「攻撃」が激しく行われました。

〈系統〉を〈系統的体系的な知識〉とおさえるなら、まずそれは学問や科学 (Wissenschaft) のことです。生活教育こそ、学問や科学をなによりも大切に学んでいます。

学問は、社会的には大学の専門の《概論》によって体系化、再構成がされています。ある時点での到達点を成果として大学生に講義することで系統を伝え、大学生はそれを新たな仮説として研究をすすめていきます。

《概論》では、有効性の高い古典を使う場合もあるし、意識して〈教科書〉として編まれたもの『西田 哲学概論』『フラインマン物理学』『The Cell 細胞の分子生物学』など）を使う場合もあり、また、学会や研究会によって世に問われた全集やいわゆる講座本（『世界教育史大系』『講座日本の歴史』など）が

活用される場合もあります。

教師は、大学で学んだ専門学問を背負って子ども・生徒と出会います。教材研究の土台にあるのは、大学卒業後も継続している学問研究なのです。教員養成の「開放制」はそれを保障するシステムといえるでしょう。

子ども・生徒の発達段階や興味、地域の状況によって、教師集団の持つ学問をどのよう（に）に（やさしく）して、また特色のある順序に組みかえて教えるかは学校ごとに多様です。学問や科学がそのまま〈教科〉になるのではないのです。

『象は鼻が長い』の主語はどつちなの」という小学生の問いが、日本語文法学の体系をパラダイムチェンジしました。系統は、探究 (inquire) の後に組みかえて獲得 (acquire)

されます。

（研究部・加藤聡一）

生活教育 キーワード

文献① 船山謙次『統戦後日本教育論争史』東洋館出版社、一九六〇年。
文献② 三上章『象は鼻が長い——日本文法入門』くろしお出版、一九六〇年。